

秋扇雜考

——中國と日本——

明の小説『平妖傳』四十回本に「扇」にまつわる興味深い一節がある。第十一回、寫し盜った天書を解讀するため「聖姑」なる人物を探して宛州の内郷縣にやってきた蛋子和尙は、折しも五月中旬の炎熱にたまらず道筋の扇鋪に入り込む。その直後のナレーションに注目したい。

那時摺疊扇還未興、鋪中賣的是五般扇子。那五般是紙絹團扇、黑白羽扇、細篾兜扇、蒲扇、蕉扇。（そのころは摺疊扇はいまだ行われず、店で賣られているのは五種類の扇子でした。その五種類とは、紙絹團扇、黑白羽扇、細篾兜扇、蒲扇、蕉扇）

店に並ぶのは五種の「うちわ」ばかり。いわゆる「扇」字は「うちわ」を意味し、「紙絹團扇」とは紙・絹を張った丸いうちわ、「黑白羽扇」は黒や白の羽毛でつくったうちわ、

秋扇雜考（堀誠）

堀

誠

「細篾兜扇」は細い竹でつくった凹形のうちわ、「蒲扇」と「蕉扇」はそれぞれ蒲葵や芭蕉でつくったうちわ（蒲葵扇」「芭蕉扇」をいうのであろう。これら「うちわ」に對して、ナレーションの初めに出てきた「摺疊扇」は、「摺疊」のきくうちわの意で、「せんす」「おうぎ」の類を指す。しかも「摺疊扇」は「那時」「還未興」（そのころはいまだ行われず）と講釋されるが、その「那時」とはいつのころを指したのか。『平妖傳』は北宋の慶曆七年（一〇四七）に河北の貝州に發動した王則の亂を敷衍する。その貝州に妖術者たちが集合する過程にある第十一回において、蛋子和尙は楊巡檢の催す無遮大會を訪ねて聖姑姑と出會うが、時に天禧二年（一〇一八）八月のことという。「那時」は、この作品を機能する「説話的」がその當時を指していったものである。中國に

中國詩文論叢 第二十一集

おける「摺疊扇」のルーツを訪ねてみれば、意外にも宋の時代に日本から海を渡ったものといい、ナレーションにいうところと時代的にも適合する。そしてこの小説の成立した明代のころには、「摺疊扇」は流行普及して重寶されていたものである¹⁾。

話を『平妖傳』にもどすと、思案のあげくに細篋兜扇を買った蛋子和尙はそこに「訪聖姑」の三文字を書きつけ、運良くそれを目にした店主から聖姑姑の情報を教えられると展開する。そもそも炎天に蛋子和尙が扇鋪に飛びこんだのも宜なるかなで、時節を巧みにとらえたストーリーが誕生し、物語はこぎみよく動いていく。この『平妖傳』に見る「扇」の記載は、生活文化史の資料的な意味をもつが、談義のついでに言えば、日本では「扇」字を、「あおぐ（あふぐ）」動作に因んで「おうぎ（あふぎ）」と訓じている。それは辭書的に、おおむね折りたたみ式の「おうぎ」「せんす」の類を指すのが主流のようであるが、「うちわ」はもちろん古く中國から傳來しているし、『萬葉集』には「扇」字で「うちわ」を歌っていることも知られる（後述）。いずれもあおいで風を起すものでありながら、同じ文字にして別物を指す現象は漢語の理解と解釋の上で厄介で話をややこしくする。

*

「扇」にまつわる中國の詩歌として見逃すことのできないのは、漢の班婕妤の詠じた「怨歌行」の作である。班婕妤は漢の成帝の即位後、選ばれて後宮に入り寵愛せられた。左曹越騎校尉の班況を父とする彼女は『漢書』を著した班固の父班彪の姑にあたる。婕妤（婕妤）はその官名である。その彼女が容顔のみの人でなかったことは次の故事からも知られる。ある時、成帝が後庭で輦に同乗するよう求めたとき、班婕妤は古の繪圖を見ると、聖賢の君王の側には名臣が控えるが、夏の桀王・殷の紂王・周の幽王という三代の末主の側には愛妾が陪乘している事實をのべて、成帝に思いとどまらせたという。いわゆる「班姬辭輦」の故事である。

彼女は日頃から『詩經』や箴戒の諸篇を誦んじて、成帝に進見するにも古禮に則ったと傳える。このように容色に加えて知徳優れた女性であったが、やがて成帝の寵は趙飛燕とその妹にうつっていく。『漢書』卷九十七下「外戚傳」「孝成班婕妤」によれば、趙飛燕は、許皇后と班婕妤が密かに巫術を行って皇帝を呪詛していると誣告した。ここに許皇后は廢せられる一方、班婕妤は審問を経て罪に問われはしなかったが、

趙姉妹を恐れて、長信宮で太后の世話をしたいと申し出て許される。「怨歌行」は、この班婕妤が失寵の悲しみを詠じた作であるという。

新裂齊紈素

新たに齊の紈素を裂けば

皎潔如霜雪

皎潔なること霜雪の如し

裁爲合歡扇

裁ちて合歡扇を爲るに

團團似明月

團團なること明月に似たり

出入君懷袖

君の懷袖に出入し

動搖微風發

動搖すれば微風發る

常恐秋節至

常に恐る 秋節至らば

涼風奪炎熱

涼風 炎熱を奪はんことを

棄捐篋箚中

篋箚の中に棄捐せられ

恩情中道絕

恩情 中道に絶えん

齊の特産になる眞白き紈素を張り合わせた合歡扇。その形状は明月のように丸い。いわゆる「團扇」である。愛しい皇帝に手ずから使っていただけるのは無上の喜び。ただ秋の季節の到來を心配する。涼風が立てば、炎熱の暑さを奪いさるからである。かくて案の定、篋箚の中に忘れ仕舞われて、有り難い恩情も途中で絶えることになる。

詩中に詠まれた「秋節」の到來。まさしく夏の炎熱を涼風

秋扇雜考（堀誠）

が奪いさる忌々しい季節であろうが、季節の推移はとどめがたく、その合歡扇が必需品であった夏場からの變化は甚だしい。「棄捐」や「絶」の語がその境遇をよく表している。自らの境遇を合歡扇・團扇になぞらえて、その失寵の身の上を嘆じた班婕妤である。その詩中の思いは哀切そのものといわねばならない。

かくて失寵の班婕妤は悲劇のヒロインとなり、後世に詩的な格好の題材を提供することになった。宋の郭茂倩の『樂府詩集』卷四十三「相和歌辭」「楚調曲下」には、「班婕妤」（陸機以下、十三首）「婕妤怨」（崔湜以下、九首）「長信怨」（王諱以下、三首）の題の作が收載されるのをはじめ、彼女を詠じた作には事缺かない。そこには往々にして「怨歌行」ゆかりの「扇」が詠出され、「團扇」「紈扇」「執扇」はもとより、「秋扇」の語をも認める。『樂府詩集』に「秋扇」の例をとれば、梁・劉孝綽の「班婕妤」に、

妾身似秋扇 妾の身 秋扇に似て

君恩絶履綦 君の恩 履綦を絶つ

同じく梁・陰鏗の「班婕妤」に、

中國詩文論叢 第二十一集

可惜逢秋扇 惜しむべきは秋に逢ふ扇
何用合歡名 何ぞ合歡の名を用ひんや

唐・劉氏雲の「婕妤怨」に、

君恩不可見 君恩 見るべからず

妾豈如秋扇 妾 豈に秋扇に如かんや

秋扇尚有時 秋扇 尚ほ有る時

妾身永微賤 妾の身は永く微賤ならん

のような字句を見る。二番目の例は「逢秋扇」で秋を迎えた扇を意味し、他の「秋扇」もまた文字通り、秋の扇、秋を迎えた扇の意を表していよう。この「秋扇」について考えるとき、まずその仲間として挙げるべきは「冬扇」の語であろう。時機にあわない無用の事物をたとえて、「夏爐冬扇」という。

夏爐とは夏の爐、冬扇とはもちろん冬の扇のことである。後漢の王充の『論衡』「逢遇篇」に「以夏進爐、以冬至扇（夏を以て爐を進じ、冬を以て扇を奏す）」とあるのに出典する語である。ただ、當世の建築環境をみれば、立て附けがよい上に、冷暖房完備とまではいかずとも相應に寒暑を凌ぐすべは確保されている。その故に、時にはかえって夏に爐を、あるいは冬に扇をはしくなる場面もないわけではない。夏爐冬扇が皮肉にも無用の長物とはなりにくい今日的な事情もあるに

はあるが、それはそれとして、この夏爐と冬扇があるのなら、その季節を入れ替えた語もまた一つの意味をなす。「夏扇」と「冬爐」とは時候にマッチした有用なものとして意味をもつにちがいない。

この時候にかなった「夏扇」に對して、「秋扇」はまさに夏を終わった扇にはかならず、今はもう不用となったものである。また「夏扇」の對極に置かれる「冬扇」は無用の長物であったが、それに對して「秋扇」はその季節の移ろい、秋節の到來を機敏にとらえ、身の上の變化を微妙なニュアンスをともなつて表現する。中道にして失つた天子の恩情。秋の思いは「愁い」に通じる。「秋扇」なる語は、そのやるせない感傷を秘めてあまりあると思われる。

班婕妤の詠じた「合歡扇」は、齊の執素を裁つて二枚張り合わせて作ったもの。その形状は「團團似明月」というように満月のごとく丸く、「團扇」とも稱される。この「團扇」の語に着眼して、ふたたび『樂府詩集』によってみれば、晉の陸機が詠じた「班婕妤」の句作に、

寄情在玉階 情を寄するは玉階に在り

託意唯團扇 意を託するは唯だ團扇のみ

の字句があるのをはじめ、その語の使用例は少なくない。また「團扇」に關しては、北魏末・楊銜之の撰になる『洛陽伽藍記』卷四の「壽丘里」（皇族の居住地域、「王子坊」）の記載の中に、最も豪奢をきわめた河間王琛の側仕えであつた朝雲が箒の名手で、「團扇歌」「隴上聲」を得意としたことを記している。その「團扇歌」については、『晉書』卷二十三「樂志下」に、晉の中書令の王珣が兄嫁の婢と情を通じて愛好すること甚だ篤く、兄嫁からひどく鞭打たれた婢は王珣の好んだ白い團扇を詠みこんで、この歌を制つたと傳えている。こうした「團扇歌」にまつわる故事がある一方で、また唐代における代表的な用例の一つとして取り上げておきたいのが、白居易の「雨後秋涼」の作である。

夜來秋雨後 夜來 秋雨の後

秋氣颯然新 秋氣 颯然として新し

團扇先辭手 團扇 先づ手を辭し

生衣不著身 生衣 身に著けず

更添砧引思 更に砧引の思ひを添へ

難與簾相親 簾と相親しむこと難し

此境誰偏覺 此の境 誰か偏へに覺らん

秋扇雜考（堀誠）

貧閒老瘦人 貧閒 老瘦の人

雨後の秋涼を詠じたこの詩の頷聯に注目したい。秋の新鮮な空氣の中で、團扇をまず手から捨て、かたじけなく脱ぎ捨てたのである。その秋涼への敏感な反應を記した二句の中で、上句の「團扇先辭手」は本邦においてよく知られたものであつたらしく、それを踏まえた詠作を検出することができる。まず、平安時代に藤原公任が撰じた『和漢朗詠集』に收載する次の和歌に注目したい。

夏果つる扇と秋の白露と

いづれかまづは置かんとすらむ

この作は『和漢朗詠集』のテキストによつては、よみ人の名を記さず、あるいは「中務」という。また『新古今和歌集』卷三「夏歌」には、壬生忠岑の作として收める。中務は天曆・天徳期の代表的な女流歌人、忠岑は『古今和歌集』の撰者の一人で、ともに三十六歌仙の中に数えられる。いま作者の問題については深入りはしないが、この和歌では、「夏果つる扇」と「秋の白露」とを對置するとともに、扇を「置く」と白露が草木に「置く」との意味を掛けて、夏から秋への季節の移ろいを巧みに詠じている。その「夏果つる扇」とは、まさに夏のものである「夏扇」をとらえて、一捻りした字句で

中國詩文論叢 第二十一集

はないか。「夏果つる」ところの季節は秋であるにちがいない。それは、文字通り、夏の時節を終わった扇、ひいては不用となった扇を意味するのであろう。「夏果つる」は、夏の時節にふさわしい扇と秋の時節にふさわしい白露とを對置する中に生まれた、秋の文字の重複を避けた表現で、端的に時節の變化を示したものといえよう。

それと同時に注目すべきは、「いづれかまづは置かんとすらむ」の文字である。「まづは」と「置く」。掛詞の「置く」が扇に對してもつ意味は、白居易の詩句にいう「手を辭す」に通じよう。すなわち、本來この作が白居易の「團扇先づ手を辭す」の句を踏まえることはもはや明明白白であらう。まさにこの「夏果つる」の作は句題の發想によって詠まれたものでなかったか。『和漢朗詠集』に収める作として採録されるにふさわしい一面をそなえたといえる。

往時、「團扇先辭手」が人口に膾炙していたらしいことは、「夏果つる」の作のみならず、時代的に新しくなるが『新古今和歌集』の撰者の一人である藤原定家の詠作によっても推測される。

はし鷹を手ならず比の風立ちて

秋の扇ぞとほざり行く

この和歌を収載する『夫木和歌抄』卷十三「秋部四」（秋風）には「文集百首、團扇秋中」と題され、また定家自身の『拾遺愚草員外』には「團扇先辭手」の詩句自體を題する。前者にいう「文集」が『白氏文集』を指すことはいうまでもなく、また後者にいう「團扇先辭手」が白居易の詠じた一句であったことも明白である。これらの記載をもつて見れば、定家の詠がこの白居易の詩句による句題の作であることは分明である。

「はし鷹」は鷹の一種で、鷹狩りに用いた。この鷹を手ならずころに吹きおこる秋風。この風とともに不用となった扇は手もとから遠ざかっていく。この「秋の扇」は、「先づ手を辭」して秋を迎えた「團扇」に發想され、「先づ手を辭す」は「とほざかり行く」というように婉曲に奥行きをもって表現される。その際、「秋」には「飽き」の意が掛けられている。

白居易の「團扇先辭手」が「怨歌行」とともに本邦に與えた影響もまた少なかつたといわねばならないが、因みに「秋の扇」の字句を備えた詠作は、確かめ得る古いところで

は先の「夏果つる」の作者とされる壬生忠岑の息子、壬生忠見に一例を認められる。

なにそむるあきのあふきををみなへし

さきにけりともみゆるいゝかな

忠見もまた三十六歌仙の一人で、この作は『忠見集』に「うへのくちばいろうのおほむあふぎに、ただつるのかたをかかせたまへる、いまかたつかたにはあしでかかせたまへるに」の第二首として見える。そのほか、『新古今和歌集』の撰者の一人である藤原家隆の『壬三集』に「月の歌とて」と題して詠まれた、

夏はててたが山のはにおきすつる

秋のあふぎとみゆるや月かけ

また「七夕の歌よみてたてまつりし時」と詞書するところの、今はとて人はおくと

七夕の秋のあふぎの名をば忘れじ

という二首が見える。「秋のあふぎ」の語はもとより、「おきすつる」と「おく」、あるいは前者には「夏はてて」の字句が認められる。すでに見た「夏果つる」の作を本歌とする詠か。ただ「秋の扇」が詠みこまれた歌作はそう多くはなかったようである。

秋扇雑考（堀誠）

「團扇」「秋扇」にまつわる日本の受容を追ってみたが、中國の小説にも「秋扇」の語を巧みにストーリーに織りこんだ作があった。唐代傳奇の代表的な一篇、蔣防の「霍小玉傳」である。

大曆の才子に数えられる李益を男主人公とするこの小説において、試験のために長安の都に出た李益は、媒妁家業の鮑十一娘の仲介を得て、霍王の娘、小玉と結ばれる。李益がかくて巫山・洛浦の歡愛を盡くした深夜、霍小玉はふと涙を流してじっと見つめていう。

妾本倡家、自知非匹。今以色愛、托其仁賢。但慮一旦色衰、恩移情替、使女羅無托、秋扇見捐。極歡之際、不覺悲至。

（妾は本より倡家なれば、自ら匹に非ざるを知る。今 色を以て愛せられ、其の仁賢に托す。但だ慮るは、一旦 色衰へなば、恩移り情替はり、女羅をして托する無く、秋扇をして捐てられしめんことを。極歡の際、覺えず悲しみ至る。）

「女羅」とは蔓草の名で、「女羅無托」はその蔓草が寄る邊を失うことをいう。つづく「秋扇見捐」は秋となって不用と

中國詩文論叢 第二十一集

なった扇が捨てられることをいう。しかし、無闇に寄る邊を失い捨てられるのではない。その前提となっているのが「一旦色衰、恩移情替」の字句である。すなわち小玉の容色が衰え、その結果として李益の恩情が移り離れることを儚んでいうのである。「捐」は班婕妤の「怨歌行」にいう「棄捐」の語に由來するとはいうまでもない。もとより「女蘿」も「秋扇」も霍小玉の身をたとえていうものでもあることは明らかである。

それとともに、しのびよる肉體的な衰老は如何ともし得ないものである。「秋扇」にいう「秋」とは、涼風が炎熱を奪いさる時節であるばかりでなく、副次的には時節の推移にともなう年齢の進行、肉體的な衰老をも内包するのである。それは人生の秋を意味するものでもある。「秋扇」の語義的世界は含蓄に富み、か細い聲でこうささやかれた李益は、粉骨碎身して相捨てざることを素練に記す。小玉の口から出た「女蘿」「秋扇」の語は、わが行く末を危惧して人情に訴えるに効果絶大であったことは確かである。

「扇」字に加えて、「妾」字もまた「うちわ」を意味する。

すでに見た「夏爐冬扇」に類する話題として興味深いのは、漢・劉安の『淮南子』『俶眞訓』に見える夏の日の裘と冬の日の妾とにまつわる言説である。

夫れ夏日に裘を被らざるは、之を愛むに非ず、燠あたたかなること身に餘り有ればなり。冬日に妾おとこを用ひざるは、之を簡おろそかにするに非ず、清すずしきこと適かなふに餘り有ればなり。

「妾」は「かわごころも」。夏爐冬扇とはちがって、夏の日の裘と冬の日の妾とを並べて、それぞれ夏と冬とに用いないことの理由を説いている。引用の字句は、聖人の「嗜欲の心」を説く中に現れるが、その裘と扇の取り合わせは身につけるもの同士で同類だから、「夏爐冬扇」とは別の意味で格好の付け合わせとなる。

こうした裘と扇とを一首の中に詠じているのは、『萬葉集』巻九の「忍壁皇子に獻る歌一首 仙人の形を詠む」の作である。

とこしへに夏冬行けや 裘かはごろも 扇放たぬ 山に住む人
忍壁皇子は天武天皇の第九皇子。「仙人の形を詠む」とあることから、この作は柿本人麻呂が忍壁皇子の邸にあった屏風などに描かれていた「仙人」の姿を詠んで皇子に獻じたものらしい。

「山に住む人」とは畫中の仙人を指す。その裘を着ながらも扇を手放さない仙人の姿。その仙人は中國ゆかりの人物で、手にする「扇」はもちろん「うちわ」である。そこには、季節としては春も秋もなく、ひたすら「夏冬」の語があるのみである。その裘と扇が混淆したファッションは、季節の變化を超越した仙人ならではのもののか。「とこしへに夏冬行けや」は、その可笑しみある不均衡な風情をからかい楽しむかのようなのである。

なれど、凡人凡婦は秋の涼風がおとずれれば、自然と扇を置く。その「先づ手を辭す」る扇こそ、いわゆる「秋扇」であろう。丸い形状の「團扇」は圓滿・團圓の象徴的な意味をもとうが、それが「先づ手を辭す」時節の到來は、その満たされた境遇からの變轉をも暗示する。班婕妤の詠懷はその身の變轉を巧みに詠じて鮮烈でもあった。それを源泉として新たな詩的世界が現出したのは、共感する人の多さを物語るものであり、文學的受容の奥行きと多様さを示している。

「秋扇」と「秋の扇」、この日中の詩語はそれぞれに哀感を伴う語として意味的世界を形成していたようである。しかし「秋の扇」の場合、積極的に失寵を暗示することはなかったように思われる。そこには、たとえば『和漢朗詠集』に班婕

好の扇自體を詠じた漢詩の作例を複数拾うことができる一方で、白詩の「團扇先辭手」に觸發されたもう一つの詩語の歩みのあったことが確認される。むしろその歩みが和語の世界に大きく機能していたように推測され、受容の一面ならざる多様なエネルギーをここに垣間見るのである。

〔注〕

(1) 朱惠良『中國人の生活と文化』（筒井茂徳・蔡敦達譯、一九九四年二月、二玄社刊）の「扇」の項に、「北宋の初めに、この折りたたみ式の扇が貢ぎ物として日本から中國に献上され、これが中國人の關心を引き、まもなく朝鮮からも陸續とこの種の扇が献上されるようになった。（中略）明の永樂年間（一四〇三—一四二四）以降は、成祖が摺扇の精巧な仕組

みと携帶に便利なことを喜び、職人に模倣して作らせたので、中國式の竹製の摺扇が大量生産されるようになり、それまで使われてきた團扇に取って代わった。」との指摘がある。

(2) 『樂府詩集』卷四十五の「團扇郎六首」には、『古今樂錄』を引いて、婢の名を芳姿としてそのいわれと歌辭をも記している。

(3) 『藝文類聚』卷六十九「扇」には、引用した『淮南子』「椒真訓」の句とともに「又曰」として、「炎火鑿池、披裘而扇、不能救也。」の字句を載せる。